

---

# ネグロドラグーン

キムン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ネグロドラグーン

### 【Nコード】

N9941Q

### 【作者名】

キームン

### 【あらすじ】

幼い頃に黒竜に家族を奪われた青年魔導師レグルスは、助手のロザリアと共にイスパニア帝国の港町に事務所を構えていた。ある日、領主の召喚令状をきっかけに反王朝派勢力の鎮圧に加わる事になる。

アルビオン王国は、この勢力を利用して国家に利益をもたらすべく計画を発動し、現場の統括に宮廷魔導師のソフィーを派遣する。主人公は学校卒業済みの魔導師歴七年、学園物に飽きたら是非。

**船酔いと魔導師（前書き）**

本作は別サイトに投稿した物です。

## 船酔いと魔導師

どこまでもどこまでも続く蒼穹は果てしなく蒼く、波打つ海は白く煌めく。

頭上高くに天を突くマストには白い帆が風を孕み、甲板に這いつくばった俺の眼下には黄色く濁った吐瀉物が広がっている。甲板に染みを増やす度に聞こえてくる舌打ちも、段々と鋭さを増す水兵の視線にももう慣れてしまった。

イスパニア帝国上級公認魔導師レグルス・マクラーレンは国外での仕事からの帰路に、イスパニア海軍三十六門搭載ジベック型フリゲート艦力カフエゴ号に便乗客として乗り組んでいた、艦長としては魔獣が出やすい海域を通る時の戦闘要員に丁度良いと思ったのだろうが、こうゲーゲーと吐かれたのではさすがに後悔しているだろう。

「いい加減にして下さいよ魔導師さん、吐くなら海に吐け海に」

艦長の顔に不機嫌の皺が刻み込まれる。

「すみません、カピターノ」

言つてすぐにまたこみ上げて来る、今年で二十四になるがどうにも乗り物酔いが治る気配が無い。

「航海長！ 彼にバケツを」

「シ、カピターノ！」

差し出されたバケツが不快感と申し訳なさで満ちていく、航海長が口を開く。

「いやはや、しっかりして下さいよ魔導師さん。我々としても“戦える”魔導師が居ると心強いですから」

頭に来るのを堪えながら、続けて口を開いた艦長の方を向く。

「この前のかい海賊狩りで魔導師がみんなやられちまってな、今は二流学校出たてのど素人が三人居るだけなんだ。あんたは帝魔出てるし魔導師歴も七年と来る。こいつは軍艦で、俺達は軍人だから

魔獣相手でもそこそこ戦えるつもりだが魔導師が居ると居ないじゃ大違いだ。いざって時は頼むぞ」

帝魔、帝立魔術専修学校はイスパニア帝国最高の魔術学校である、ここカデイスにも分校があり、俺はその出身だ。

六年間の初等教育を受けた後、五年間の高等教育を受けるから十七で卒業し、社会へ出るのだ。

艦長にそこそこに挨拶を済ませてキャビンに引き下がる、潮風に当たるのも悪くないが、それ以上に横になりたい気分だった。

魔獣が来れば呼ばれるだろうから、少しでも気分を良くしておくに越した事は無い。

隔壁で無理やり区切られた船室のハンモックで揺られていると、急に艦内が騒がしくなったように感じた。部屋に飛び込んできた士官に叩き起こされ、水兵達が固定索を解き砲を押し出す中を通り、露天甲板に連れ出される。

艦長が大声で指示を飛ばしながら歩いてきた。

「クラーケンだ、いけるかい？ 魔導師さん」

「勿論ですカピターノ、ただ奴を水面近くまで引き上げて頂かないと少々厳しいですが」

「任せろ、それぐらいの装備は有る」

艦長は得意そうに笑って、導火線の伸びた砲弾を見せてきた。

それは叫石と言う魔石を利用した砲弾らしい、叫石は強い衝撃を与えるヒステリックな女の金切り声の様な、実に耳障りで大きな音を発する。

艦長は説明を続ける。「このカルフエゴ号には片舷十八門のカノン砲が有る、後ろの三門で叫石弾を撃って、体が出た所を残りのお五門で撃つ。そうすりゃ奴さんも興奮すらあな、その後はあんたに頼むぜ」

「シ、カピターノ。ああ出来れば砲弾を数発お借りしたいのですが」

艦長は不思議そうな顔をしながらも砲弾を持って来るよう命令してくれた、後は各々が仕事をするだけである。クラーケンの目は

明暗の識別程度にしか役立たず、匂い、そして音で獲物を探し、周りの水の振動で自分の移動する方向を認識している、格段に耳が良いのだ。だから格別に大きな音を立ててやれば方向感覚を失い、水面に頭を出す、非常な興奮状態にもなる。

クラーケンは通常船を引きずり込む際には船の真下に潜り込んでしまうから本体にろくに攻撃出来ない、しかし極度の興奮状態では気が短くなるのかどうか知らないが水面すれすれを移動してくるのだ、これなら攻撃が本体に届く。一門に付き四人配置された水兵達は、号令に従って規則正しく装填動作を行っている。

火薬袋を切り裂き、火薬を砲口から流し込む。おくりと呼ばれる詰め物を詰め棒で詰め込む。後ろの三門は着火した叫石弾、残りの十五門は重い鉄球を詰め棒で詰め込み、照準を合わせ、砲尾近くの撃鉄を起こし、発射索を握る。

巨大な水しぶきが近づいて来る、鋭い声で号令がかかる。

「十六から十八番、撃て！」

発射索が引かれ、撃鉄が落ちる。火打ち石と打ち金がつかり合い、火花が散り、火薬が爆発し、閃光する砲口から砲弾が撃ち出される。砲が後退する。

一発は爆発が早すぎ、もう一発は水面に潜ってしまったが、真ん中の一発が水面ギリギリの所で爆発した。

水面がぬっつと盛り上がり、赤く丸い大蛸の胴体が見えてきた。

「左舷斉射、撃てえ！」 十五門の火砲が一斉に火を噴く、船体が振動し、硝煙が吹き出る。

良くは見えないがクラーケンの胴体部からはどくどくと血が流れ出ているのだろう。

「第二射は無理だ、頼むぞ！」

「お任せを、カピターノ」

まず四発の砲弾を浮かべ、直列させる。次に空気中の水分を凝固させて水にし、砲弾の列に纏わせ、それを固めて砲弾を核とした氷槍を作り上げる。魔術は水分や熱、磁力や静電気と言った自然の物

質を操る事が基本なのだ、クラーケンの様な水に属する類の輩には電撃が最も効率良く葬れるのだが、水中に居るから電撃はたたき込めない。船底にはフジツボの付着を防ぐ為に銅板張りになっていれから、近くに電撃が走れば何かまずいことになりそうだ、特に、落雷術を使って万が一艦に当たれば大火事だ。

砲弾を核にしているから普通の氷槍よりも重い、これなら水面を突破しても勢いを保てる。

ただの水しぶきでは無く明確にクラーケンと認識できる距離まで来た、うつすらと胴体や脚、そして眼球が見える。

浮遊させた氷槍を更に高い所へ持って行き、負荷がかからないように、回転させながら出来るだけ小さな入射角で水面下の目標へ叩き込む。狙うはあの不気味な眼球だ。

水面を突破した氷槍はクラーケンの眼球に突き刺さりながらも回転を続け、眼球の“奥”、すなわち脳に向かって突き進む。

手心えを感じる、海が朱く染まる。歓声が湧き上がる、いつの間にか甲板に上がっていた例の新米魔導師達も目を見開いてこっちを見ている。

「さすがですな、魔導師さん。いや、セニョール・マクラーレン」  
「いえ、艦長の指揮とこの艦の砲撃のおかげです」

艦内に活気が満ちる、親しげに肩を叩く物も多い。

最近はお使いの様な仕事が多く、大型魔獣の討伐はご無沙汰していたのだが、人と連携して脅威を打ち倒すと言うのはこんなにも良いものだったか。

……胸に、喉に、込み上げて来る。

「艦長、皆さん」

いくつもの笑顔が向けられる。深く息を吸い、込み上げて来る物に耐えながら口を開く。

「誰か、私にバケツを」

## 嗜虐的な助手

縦揺れと横揺れを繰り返す甲板から解放され、港の固い地面に足が着いた時は罪を赦され地獄から天国へと引き上げられる罪人にもなった気分だった。

降りるのを手伝ってくれた屈強な水平は天使には程遠かったのだが。

艦長に礼を述べ、家路につく、事務所兼用の我が家は港から結構近いのだ。

ここカデイスはイスパニア帝国屈指の貿易港であり、軍港でもある。深い湾口は守りに適し、風も防ぐ。

岬にそびえるカデイス城の城壁上の大砲は市内の主要な道路と湾内の艦船を射程に捉え、速やかに市内の脅威を掃射出来る。この支配者は恵まれている。

イスパニアの貴族は封建時代の領地を元に階級を整理し再分配されており、封建時代よりは整理され、皇帝を最上位とした序列、力関係が明確になったが、イスパニア全体の政治としては封建制の色が残っており、地方の自治権がかなりの強さを保っている。

公爵、大公爵は王族が占めており、州単位で治めている。侯爵、伯爵はその下の県単位で収める、もともとはどちらも伯爵だったのだが、危険度の高い国境沿いや辺境地域を治めていた辺境伯が侯爵となった。子爵には副伯、つまり伯爵の補佐として都市行政を管理していた代官達が列せられた。男爵は国家の平定前からその土地を支配していた豪族で、国家の平定に貢献した者が褒美として列せられ、支配地域を領地として与えられた。

整理し再分配したおかげで、独自に支配する領地を持ち互いの力関係に優劣が付けにくかった貴族制も、州、県、市で区切りそれぞれの統治責任者とする事で県令や市長の様な役職に置き換えて考えられる様になり、格段にわかりやすくなった。

カデイス伯爵も、本来ならカデイスと呼ばれるのはこの港町カデイス市だけで、当然周辺の地域にはそれぞれ別の名前が有り、それぞれの領地に応じた爵位が有る。

バルカルセ家はカデイス伯爵以外に複数の爵位を持っているのだが、バルカルセ家が支配する地域をまとめてカデイス県とし、バルカルセ家の当主を統治責任者とする事で全ての称号がカデイス伯爵にまとまったのだ。

領地も分割ではなく後継者に一括で譲渡し、結婚による領地の併合や領地の売却、割譲を禁止して個人の支配地域が広くなりすぎないようになった。

明確な序列を作り皇帝をその最上位に置く事で、多少なりとも王権を強める事が出来たのだ。

絶対王権、中央集権の徹底されているアルビオンには程遠いのだが。貴族制が大幅に改変され、他家の領地を併合して富を増やす事が出来なくなった貴族は領地を増やす事ではなく自分の領地の生産力の向上に努めた。

更には、この改変が行われた頃には私兵では無い国家の常備軍、いわゆる正規軍が完成していた。その武力を背景に、統治能力無しと判断された者の領地を没収し爵位を剥奪する、と言った制度まで有ったので、貴族達の努力も半端な物では無かったであろう。

おかげでカデイスは大いに発展し、その富はバルカルセ家を潤した。

バルカルセ家の財力が倍増しになって行く中で、カデイスに港町と堅固な要塞都市に次ぐ新たな性格が備わった、魔導師の街である。

バルカルセ家は非常に優秀な魔導師の家系である、イスパニア帝国建国の為の戦争で並々ならぬ武勲を挙げてカデイス伯爵の地位を授かったのだ。

バルカルセ家はその財力を以て魔導師の育成に必要な施設を次々と建て、教師になるに足る魔導師を雇い入れ、魔術関連の税率を下げ、自らが手本を示しながら魔導師を育成して言った。

バルカルセ家と教師達の熱心での確な指導と充実した設備により、アングルシア州内の魔導師にとってカデイス出身である事が一種の優秀さの象徴となった。

そうしてカデイスは魔導師が集まり、競い合う街となったのだ、俺はその街に事務所を構えられる事を誇りに思っている。

いつの間にか大分歩が進んだ、事務所ももうすぐそこだ。

助手に留守を任せてある、彼女なら清潔な状態に保ってあるはずだ。玄関の階段を上り扉を叩く、少しして扉が開かれ、助手が出迎えてくれた。

「レグルス様、お帰りなさいませ」

上級公認魔導師ロザリア・エクスタシア、帝魔の後輩であり助手である彼女は正直独立して事務所を構えても十分やっていける技量を持っている。

緩やかに波を打つ濃い茶色の長髪と湿り気を帯びた灰色の瞳はまさに綺麗としか言い様が無い、紫色のローブも良く似合っている。目を細めて小馬鹿にした様にニンマリと笑う顔は“見る人”が見れば取り憑かれそうだ。実際、その笑顔に見合う趣味も有るのだが。

ロザリアは目を細める例の笑みを浮かべ、口を開いた。

「レグルス様、実は今お客様がお見えになってまして」

「客、依頼か？ 待たせたらまずいな」

彼女は口到手を当てて忍び笑いをして、“そうですね、早く行って差し上げた方がよろしいかと”と言った。客間に通された時、まず自分の目を疑い、次に幻術か何かかと思ひ、最後にロザリアの常識を疑った。

「ちょっと待て。これ。いや……この方は何だ？ ロザリイ、もし君の個人的な趣味でやってるのなら正直解雇も考えないと」

「嫌ですわぁレグルス様、趣味だなんてとんでもない、仕事ですよ仕事。マクラーレン魔導師事務所の威厳と体面を保つのも大切な仕事でしょう？」

“それ”に目が行きそうになるが、まさかじろじろ見る訳には行

かない。

「他にもやり方が有ったんじゃないかな……これは余りにも」  
気にしない様にしても気になる物は気になる。

顔を向けた先には女が縛られて、いわゆる股をおっぴろげた形で宙吊りにされていた、口にはハンカチを詰め込まれている。金髪に緑色の目で、顔立ちは気の強そうな感じなのだが今は全体的に叱られた子供の様な感じた。目だけは復讐の色が見えるが。

何をしたのだと聞きかけたがやめた、近くの卓の上に溶けかけの蠟燭や九節鞭、縄等その手の道具が並んでいた。

ロザリアが口を開いた。

「その女はシモーヌ・ヴァレリー、ガリア系の雌犬、彼女が同じ文化圏の国に属するなどまさに屈辱の極みです」

「そこまで言わなくても、大体何だ仕事って」

「先程も申しました通り、私達の事務所の名誉を守るのも大切な仕事のはずです。侮辱されて黙っている事も無いでしょう」

そう言って、彼女はスツと視線を落とした。

「侮辱？」

もし、悪い噂に繋がりそうな事を言い触らされているとしたら、それは商売に支障が出る。

彼女はさつきよりも強い口調で話し出した。

「この私に向かって、上級公認魔導師の地位は試験官を体で騙して手に入れたのだろうとか、少し顔と体つきが良いだけで頭の中は空なんだろうこの淫乱だとか色々と生意気な事を」

「要は個人的に頭に来たんだな？ とにかくもう止めだ、変な噂がたつたらどうする」

戒めを解いてやろうとシモーヌに近づく。

「でもレグルス様、締められる時に徹底的に締めておかないと後に面倒が残りますよ？ 中途半端な攻撃は復讐を生むだけです」

ロザリアの言葉を無視して口に詰められたハンカチを抜き取る。

根拠も無く馬鹿にされて頭に來たのは解るが、やりすぎだ。

ハンカチを抜いてやった後、感謝の言葉の一つでも貰えると思っただが、予想は大いに裏切られた。 magari なりにも助けてやった相手から決闘を申し込まれる等誰が予想出来るだろうか。著しく名誉を傷付けられ、名誉挽回の為に決闘だとか、貴族同士の婚約争いに決着を付ける手段の一つとしての決闘ならまだしも、自分が名誉を傷つけようとした相手に返り討ちに会い、そこからその相手の雇い主に決闘を持ちかけると言うのは聞いた事が無い。

それは名誉を賭けた決闘ではなくただの喧嘩だ、そう言ってたしなめたのだがさらに呆れた言葉が返ってきた。

「その女が出来が良いのは解ったわ、だからあれよ！ きっとあなたは助手が優秀だからやって行けてる様なヘタレなのよ、あたしがそれを証明してあげるわ！」

なにがしかのくだらない理由、 - - 恐らくは嫉妬か何か - - でロザリアにケチを付け喧嘩をふっかけて手前引っ込みが付かなくなつたと見える。自分の非を認めるのが大嫌いな性格なのだろう、頭に血が上っているのも有るだろうが。

何にせよ、ここまであからさまに喧嘩を売られてすごすごと引き下がってはロザリアの言うとおり我らが事務所の看板に傷が付くと言う物だ。

シモーヌに日取りの希望を訊くと耳障りな声で今すぐ！ と叫んだ。

シモーヌを解放し、ロザリアを付添いにこういつた行為にうつってつけの場所に連れ立って向かった。 その直径二十メートルの円形の広場は、古くから決闘の舞台に選ばれて来たおかげで市民達に流血広場等と言う俗っぽいあだ名が付いてしまった。

魔導師同士の決闘の規定通りにお互い五メートルの距離を取り、間に立ったロザリアは朗々と決まり文句を歌い上げ、開始を告げた。相手の出方を見る、開始の合図の後、シモーヌはすぐさま口を開いた。

「エルフレイマデサラムンドラ！」

防ぐにはつらそうな、二匹の蛇のごとく渦巻きながら迫ってくる炎を横跳びに避ける。

それにしても、呪文を叫ぶとは愚かな事だ。

こっちは口の中で籠もる様に発音する、術を無詠唱で発動出来る事の利点は発動が早い点だけで無く、発動するまでどんな術か解らないと言う点がある。詠唱する場合でも、呪文は出来るだけ相手に聞こえない方が良く、呪文が聞き取られれば発動する術がバレる、それでは何がしたいか丸解りと言う物だ。

「ピアツシングローズ」

三本の茨のツタが体を貫くべくシモー又に向かう、お世辞にも早いとはいえない。シモー又はいかにも余裕と言った身のこなしでツタを避ける。

俺としては、最初から体を貫こうなどと思つては無いが……

「ツウイスティングアヴィ」

シモー又に向かつてゆるゆると伸びていったツタが先程とは見違える様な速さで絡みつき、束縛した、よく縛られる女である。

間髪入れず束縛されたシモー又に電撃を放つも、瞬時に水壁を展開去れてしまった。伝導率の高い水の水壁を電撃が突破するのはそれこそ至難の業だ。

水壁が崩れ、ツタを焼き落として自由になった得意顔のシモー又が目に入る。

どうやらシモー又は崩した水壁の水滴を使って氷槍を作り出すらしい、水壁は中々に大きな物だったから、凍らせるにはそれだけ時間がかかるはず。

魔導師歴ももう七年、一段二段で終わる攻撃を仕掛ける程甘くは無いつもりだ。

「ダークネスピアツサー」

魔法陣から先の尖った、黒く染まった水晶の塊が飛び出す。

シモー又は慌てて作りかけだ氷槍をただの水に還元し水壁を再構

築しようとするが、その水は彼女が一度に、瞬時に扱うには多すぎた。

水晶は薄っぺらな水壁を突き破り、シモーヌの軀を貫いた。

服を血に染めながらシモーヌはへたり込む。「勝者、レグルス・マクラーレン！」

ロザリアの声が勝利を告げる、自らの主の勝利宣告をした後、ロザリアはすぐにシモーヌの介抱に向かった。

なんだかんだ言っても殺すつもりは無いらしい。

虐める犬が居なくなつては困る等と聞こえるのはきつと気のせいだ、そうに違いない。

ロザリアは手当てをしながら耳元に顔を寄せて囁きかけている。

「詳しい話を伺った事はありませんがレグルス様は幼少のみぎり黒竜に家族を奪われ、それはそれは苦勞したそうです。苦勞の甲斐有つて公認魔導師採用試験には上位で合格、上級公認魔導師昇級試験も突破いたしました、努力と言う物を知っておられるのですね。あなたの様な幸運の塊とは、訳が違うのです」

幸運の塊、確かシモーヌはヴァレリー商会と言う割と大規模な商会の会長の娘だったはずだ。たまたま金持ちの家に生まれ落ち、たまたま魔術の才があり、たまたま容姿に恵まれた、確かに幸運の塊だ。

「森羅万象数在れど、私がこの世で許せない物は二つ。一つは香りの飛んだぬるいコーヒー、もう一つは努力した“つもり”になつてる糞アマです、まあ野郎もですが。何でしたら、何と言つたかあなたの男……テオでしたっけ？ そちらの方に二度と顔向け出来ない様な淫らで惨めな女に躰直してもよろしいのですか？」

シモーヌが嚙り泣きを始めたのも無視してロザリアは執拗にネチネチと攻め続ける、こういう時の彼女は実に楽しそうだ。

しかし彼女の楽しみも中断されてしまった、広場の入り口に、柄の悪そうな感じの男がいかに怒っていきそうな感じで、今にも俺達を殺してしまいたそうな感じで足っていた。

全て推測の域を出ないが、多分全部当たっている。

「あつテオ！ ねえ聞いて、今こいつらに虐められてたのお！」

「いや、これは彼女の方から申し込まれた決闘でして」

男、テオは聞く耳を持たずにズカズカと近寄り声を張る。

予想通りの下卑た濁声だ。

「お前ら俺の女に何してんだ！」

所詮はただのやくざ者に過ぎないが、クラークン、シモーヌと来ての三連戦ではさすがに辛い。

どうしようか逡巡する俺の前に、ロザリアが歩み出た。「レグルス様、ここは私が」

それを見て、テオはゲラゲラと笑いながら言った。

「おいおい随分威勢の良い姉ちゃんだなあ！ これじゃあ本気が出せないかあ？」

ロザリアは鼻で嘲る。

「相手が女と見ると舐めてかかるのは殿方の悪い癖ですわねえ。私

が特に許せないのは、無条件に男が女より優れていると思いつく男

根主義者と嫌いなものがさつきと違つとケチを付けてくる方です。

あのテオの様な方を見ていると弱い犬程良く吠える物だと痛感致しますわねえレグルス様あ？」

彼女はこちらを向いてニタア、と笑う。

「このアマあ、ふざけんな！」

「盛の犬じゃないんですからアオンアオン鳴かないで下さいますか？ な、ん、な、ら」

髪をかきあげて睨み付ける。低く妖しい声だ。

「躡直して差し上げましょうかねえ、んふふつ」

テオは我慢の限界と言った感じで二連装の拳銃をロザリアに向け、引き金を引いた。

だが聞こえるべき銃声は聞こえず、打ち金が火打ち石を打つ力チンと言う音だけが虚しく響いた。不発だ。

よく見ると火皿と火蓋の間から水が溢れ出ている。

「ああ残念、発火薬が湿ってしまったって銃は撃てませんねえ」  
どうやら火皿の中に水を作り出したらしい、あんな小さな空間に局所的に水分を凝固させるのは、正直かなり精密で難解な作業である。

テオは聞くに耐えない罵詈雑言を口走りながら、剣を抜いて走ってくる。

距離の開いた剣士なんてのは魔導師からすれば良いのだ。ロザリアはテオの進路上に目立たないように氷を張った、テオは氷でもろに足を滑らせ転倒し、後頭部を石畳に打ちつけた。

があともぐうともつかないうめき声が聞こえる。

「ああああああ転んでしまって涙まで流して、それでも男の子ですか？ お立ちなさい」

よろめきながらも健気に立ち上がったテオは、足元をよく見ながらロザリアとの距離を詰めようと走り出した。

「フラッキングローズ」

空中に現れた魔法陣から急速に伸びた茨のツタが、足元を注視するテオの顔面に叩き付けられる。「今度は頭がお留守なようぞ」

テオは顔面を手で押さえて何か呻いている。

「さ、て、そろそろお仕舞いに致しましょうか。ツウイスティングアヴィ」

ツタが四肢に絡みつき、テオの動きは封じられる。

「てめえ覚えてろこの糞アマあ！」

「ええ良く覚えておきますよ、その惨めな様を」

ロザリアはテオの腰から先程の拳銃を抜き取って逆手に持ち、台尻を頭に叩きつけた。

テオの目が白眼を剥き、支えを失った様に頭ががっくりと垂れた。ふとシモーヌに目を遣ると、やるせなさそうと言いか、完全に興味を失った目で連れ合い、彼女の中では“元”連れ合いになったであろうテオを眺めていた。

「さっレグルス様、万事上々仕上がりました。帰りましょう」

ロザリアの労をねぎらい、踵を返して家路に付いた。  
今日はもう、休もう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9941q/>

---

ネグロドラグーン

2011年2月17日23時37分発行